

フランス語の中間構文と能格構文について*

三 藤 博

1. はじめに

本論文は、フランス語の中間構文と能格構文とについて、それぞれの持っている統語論的、及び意味論的な諸特性を整理した上で、それらの諸特性を N. Chomsky の提唱している Minimalist Program に基づいて統一的に説明し得ることを主張するものである。

以下、第2節ではフランス語の中間構文、第3節ではフランス語の能格構文の統語論的、及び意味論的な諸特性を概観して整理し、第4節では、それらの特性を、理論的説明を要求する explananda (説明すべき対象) の形にまとめて問題設定とする。ついで、第5節で、本論文における分析が理論的基盤としている、藤田耕司氏による Minimalist Program に基づく英語の中間構文と能格構文との分析を概観する。その上で、第6節において、フランス語の中間構文と能格構文とに対する分析を提示する。最後の第7節では、本論文が提示する視野から、フランス語学における大きな問題の1つである代名動詞の研究に対して、これまでの諸家の研究にはなかった全く新たな観点が可能になる、という展望を述べる。

2. フランス語の中間構文

フランス語においては、(1), (2) に示すとおり、中間構文は必ず代名動詞を用いて表される。このことは、動詞の表層の形態を変えることなく中間構文を表す英語とは対照的である。英語の中間構文の例を (3) に掲げる。

- (1) a. Ce vêtement se lave à l'eau tiède.
- b. *Ce vêtement lave à l'eau tiède.
- (2) a. Ce livre se lit facilement.

- b. *Ce livre lit facilement.
(3) a. This book reads easily.
b. Bureaucrats bribe easily.

中間構文の特徴としてきわめて重要な点は、この構文を用いた場合、潜在的な動作主 (Agent¹⁾) の存在が含意されている、ということであり、この点は、多くの研究者が一致して指摘している点である。

たとえば、動詞 *brûler* は、(4a,b) の2つの例文で分かるとおり、主語として、動作主を取ることでもできれば、原因主 (Causer) を取ることもできる。

- (4) a. Les bandits ont brûlé cette forêt. [動作主]
b. L'éruption du volcan a brûlé cette forêt. [原因主]

ところが、この動詞を中間構文で用いた (5a) は、必ず動作主主語の (4a) に対応するものと解釈され、原因主主語の (4b) に対応するものとは解釈され得ない。つまり、(5a) が実際に発話される自然な状況は、たとえば (5b) のような場合であって、日本語でその解釈を表せば、(5c) のようになるであろう。したがって、(5a) は (5d) とほぼ同じ意味内容を表しているわけである。

- (5) a. Cette forêt se brûle facilement.
b. Le chef des bandits a dit : « Cette forêt se brûle facilement. »
c. 山賊のリーダーが言った。「こんな森燃やすのはわけはねえ。」
d. On peut brûler cette forêt facilement.

さらに、このように中間構文においては潜在的に必ず動作主の存在が含意されているにもかかわらず、その動作主を構文上に明示的に表すことができない、という点も、この構文の重要な特徴である。(6) はこのことを示す例である。

- (6) a. *Cette forêt se brûle facilement par les bandits.
b. *Cette forêt se brûle facilement par n'importe qui.

次に、中間構文のもうひとつの重要な特徴は、1回きりの個々の事態を表す構文ではなく、必ず主語の持っている一般的な特性や可能性を示す構文である、という点である。つまり、中間構文は、決して「現象文」にはならず、主語の特徴づけ (characterization) を行なう文を構成する、ということである。

このことを示す具体例として、(7a) は中間構文として解釈され得る文法的な文であるが、これに対して、(7b) は非文である。これは、(7a) が、一過性の個別の事態ではなく、テルトゥリアー

ヌスの『弁明録』と神学論考とについての特徴づけになっているのに対して、(7b)の方は、その意味内容がまさに個別の事態になってしまうため中間構文と相容れず、非文になることを示している。

- (7) a. *Apologeticum* de Tertullien se traduit souvent dans les lycées, mais ses traités théologiques se traduisent très rarement.
 b. *Des traités théologiques de Tertullien se sont traduits dans le Lycée Henri IV hier.

また、(7)のペアも示しているとおおり、上に述べた意味的な制約と密接に関連して、中間構文では動詞のアスペクト形態に厳しい制限が課されている。すなわち、中間構文は複合時制と共起することはできず、未完了アスペクトとのみ共起し得る。実際には、ほとんど現在形で用いられる。この際の現在形は、*atemporal present* とか *supratemporal present* とか称される、発話の時点に定位されていないようなタイプの現在形であると考えられる。

以上、本節で見てきた中間構文の統語論的、意味論的な特徴を(8)としてまとめておく。

- (8) ————— フランス語の中間構文の統語論的、意味論的特徴 —————
- a) 規則的で、生産的な構文である。
 - b) *se* の存在が義務的である。
 - c) 必ず潜在的に動作主があるものと解釈されるが、この動作主を明示することはできない。また、この潜在的な動作主は、典型的な総称解釈 (*generic interpretation*) を受ける。
 - d) 一過性の事態を表すことはできず、一般的特性や潜在的可能性を表す。したがって、未完了アスペクト (ほとんど現在形) に限って用いられる。

3. フランス語の能格構文

前節で見た中間構文とは異なり、フランス語においては、能格構文を構成するには、代名動詞の形を取る場合と、いわゆる「自動詞」²⁾の形を取る場合とがある。(9)に挙げた *casser* は、この両方が可能な動詞である。

- (9) a. Cette branche s'est cassée hier.
 b. Cette branche a cassé hier.

よく知られているとおおり、*casser* のように両方が可能な動詞はむしろ少数派であり、動詞によって、(10)の *briser* のように代名動詞形のみが可能な動詞、(11)の *vieillir* のように逆に「自動詞」

形のみが可能な動詞が多数存在している。

- (10) a. Cette branche s'est brisée hier.
b. *Cette branche a brisé hier.
- (11) a. *Jean s'est beaucoup vieilli à cause de ce travail épuisant.
b. Jean a beaucoup vieilli à cause de ce travail épuisant.

能格構文の意味論的な特徴を、前節で検討した中間構文のものと比較してみると、両者がまさに対照的な特徴を備えていることが分かる。

まず、中間構文の場合には潜在的な動作主の存在が含意されているのであったが、これに対して、能格構文では、逆に動作主ではなく、原因主の存在が想定されるか、または自発的、自然発生的な事態であるという解釈を受ける。つまり、動作主の存在と能格構文とは、相容れないのである。この点は、能格構文の性質として、基本的に重要な点である。

たとえば、上の (8), (9) は、表層主語の「この枝」が、台風などで折れたとか、あるいは特に外的な原因もなく自然に折れた、ということ述べているのであり、枝が意図的に折られた場合に、(8) や (9) のような能格構文を用いることはない。そうした内容を表す場合には、言うまでもなく、(12a,b) のような構文が用いられることになる。

- (12) a. On a cassé cette branche hier.
b. Cette branche a été cassée hier.

同じ点を示すために、もう一つだけ例を挙げておきたい。(13a) に示すように *moisir* という動詞は、代名動詞形で能格構文を示すことができる動詞であるが、(13a) の解釈も、上の (8),(9) と全く同様に、意図的に (たとえば、新種のチーズの商品開発のためなどで) 黴を生やしてみた、ということにはならないわけである。このことに対応して、基礎となる他動詞構文においても、*moisir* は、(13b) のように原因主を主語に立てて用いることはできても、(13c) のように動作主を主語とすることはできない。動作主を主語とする場合には、(13d) のように言わなければならないわけである。

- (13) a. Ce fromage s'est moisi rapidement.
b. L'humidité de l'air dans cette chambre a moisi ce fromage. [原因主]
c. *Jean a moisi ce fromage. [動作主]
d. Jean a fait moisir ce fromage.

次に、中間構文にはアスペクトに関する厳しい制約があったが、既に本節の例文が示しているとおり、能格構文には、代名動詞形によるものであれ、「自動詞」形によるものであれ、そうし

たアスペクト制約は全く存在しない。

さらに、このことと密接に関連して、能格構文は、まさに「現象文」として、一回きりの事態・現象の生起を記述する文を作っているのである。

以上、本節で見てきた能格構文の統語論的、意味論的な特徴を(14)としてまとめておく。

- (14) ————— フランス語の能格構文の統語論的、意味論的特徴 —————
- a) 動詞に依存し、規則的、生産的構文ではない(次項b)。
 - b) *se* が存在する場合と、しない場合との両方があり、その分布は個々の動詞に依存している。
 - c) 潜在的な項 (Argument) は、動作主ではなく、原因主である。
 - d) 一過性の事態を表すのに用いられ、中間構文に見られたアスペクト制約もない。

4. 説明すべき点

以上、前の二つの節でまとめた中間構文と能格構文との統語論的、意味論的諸特徴は、すでに多くの研究者によって指摘されてきているものである。しかしながら、それらの特性を整理した(8)及び(14)は、いわゆる「記述的一般化 (descriptive generalization)」のレベルにとどまっているものである。

我々は、(8)と(14)という、それぞれ中間構文と能格構文との特性を理解し得たことで決して満足してしまわず、むしろ(8)と(14)とは、理論言語学的説明のための出発点である、と見なさなければならない。つまり、どのような普遍的な統語論上の諸原則と、フランス語のどのような統語論的な特性との共謀 (conspiracy) から、(8)及び(14)が導かれてくるか、このことを説明することこそ、理論言語学が自らに課す課題である、「説明的一般化 (explanatory generalization) にほかならないのである。

そこで、こうした理論言語学の観点に立った上で、説明すべき点、すなわち *explananda* を改めて整理してみると、(15)のようになるであろう。

- (15) フランス語の中間構文と能格構文に関する説明すべき点 (*explananda*)
- フランス語において、
- a) なぜ、中間構文が必ず代名動詞形で表現されるのに対して、能格構文には代名動詞形と「自動詞」形との2種類があり得るのか。
 - b) なぜ、中間構文は(8)、能格構文は(14)の特徴を持っているのか。
 - c) 代名動詞形の能格構文と、「自動詞」形の能格構文との間には、どのような違いがあるのか。

ここで特に強調しておきたいことは、これまでのフランス語学における研究では、本論文が対象としているような問題を、ほとんどの場合、「代名動詞論」として、つまり代名動詞をめぐる諸問題の研究という枠組みの中で分析してきたために、(15)のa)に掲げた問題意識が、そもそも初めから欠落している、という点である。しかしよく考えてみれば、中間構文・能格構文の両方を、基となっている他動詞と表層的には全く同じ形で実現している英語と比較するだけでも、上のa)は、理論的な説明を要求する重大なポイントであることが分かるのである。

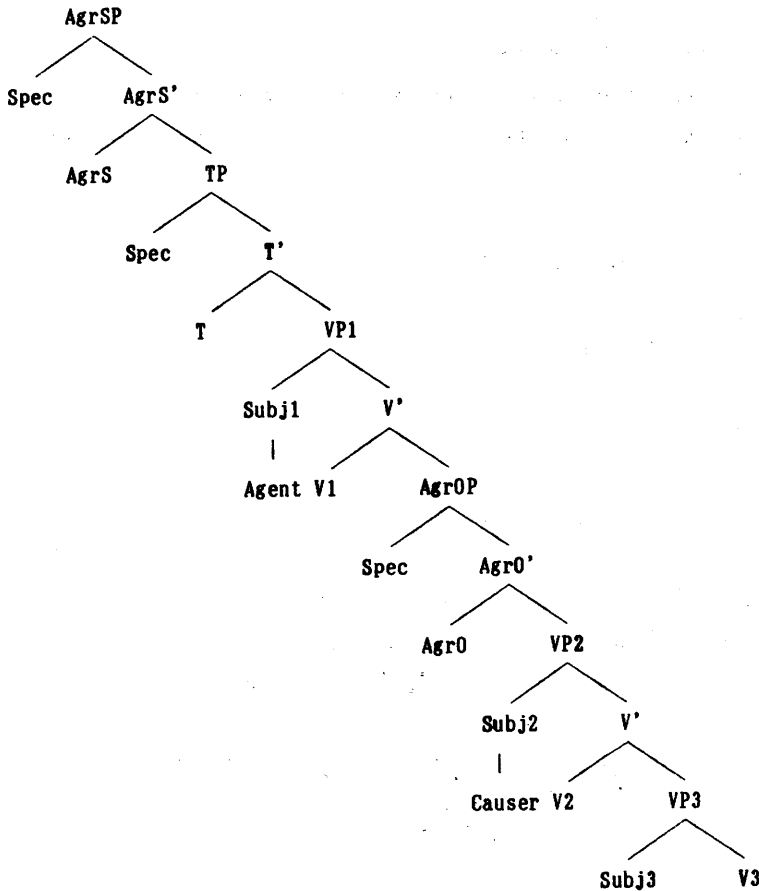
5. 藤田氏のフレームワーク

本論文では、フランス語の中間構文と能格構文の諸特徴を、統語論的に説明することを目指すのであるが、その際に、Minimalist Program に立脚して英語の中間構文と能格構文を分析された藤田耕司氏のフレームワークを基礎として用いることとなる。

そこで、本節では、フランス語の分析に先立って、藤田氏による英語の中間構文・能格構文に対する分析を概観しておきたい。

藤田氏のフレームワークは、階層的な動詞句 (Layered VP, Split VP) を設定するところに、その最大の特徴がある。(16)に示したのが、階層的な動詞句の導入に基づく文の構造である。

(16)



(16)において、動詞句 VP2 の指定部の位置が、[原因主] という θ -役割を受け、さらに、DP が動詞句 VP2 から動詞句 VP1 にまで移動していった場合には、いわゆる「合成的 θ -役割付与 (compositional θ -role assignment)」によって、[動作主] という θ -役割を受けるものとする。このことは、以下の説明においてしばしば用いられるのこととなるので、(17)として整理しておく。

- (17) a. VP1 の指定部： 動作主として解釈される
 b. VP2 の指定部： 原因主として解釈される

次に、VP2に関する統語論と意味論との対応 (syntax-semantics correspondence) の規定として、(18)を立てる。

(18) VP2は「事態 (event)」の統語論的反映である。

VP2 is the canonical structural realization of event. (Matsumoto & Fujita (19))

VP2が Complete Functional Complex を成している時、そしてその時に限り、VP2が Event Argument として機能する。

さらに、VP1とVP2とに関して、(19)に示す規定を立てる。

(19) 総称量化と存在量化に関する領域指定

a. VP1: 総称量化の領域

b. VP2: 存在量化の領域

最後に、中間構文と能格構文に関して、分析の眼目となるのが(20)である。

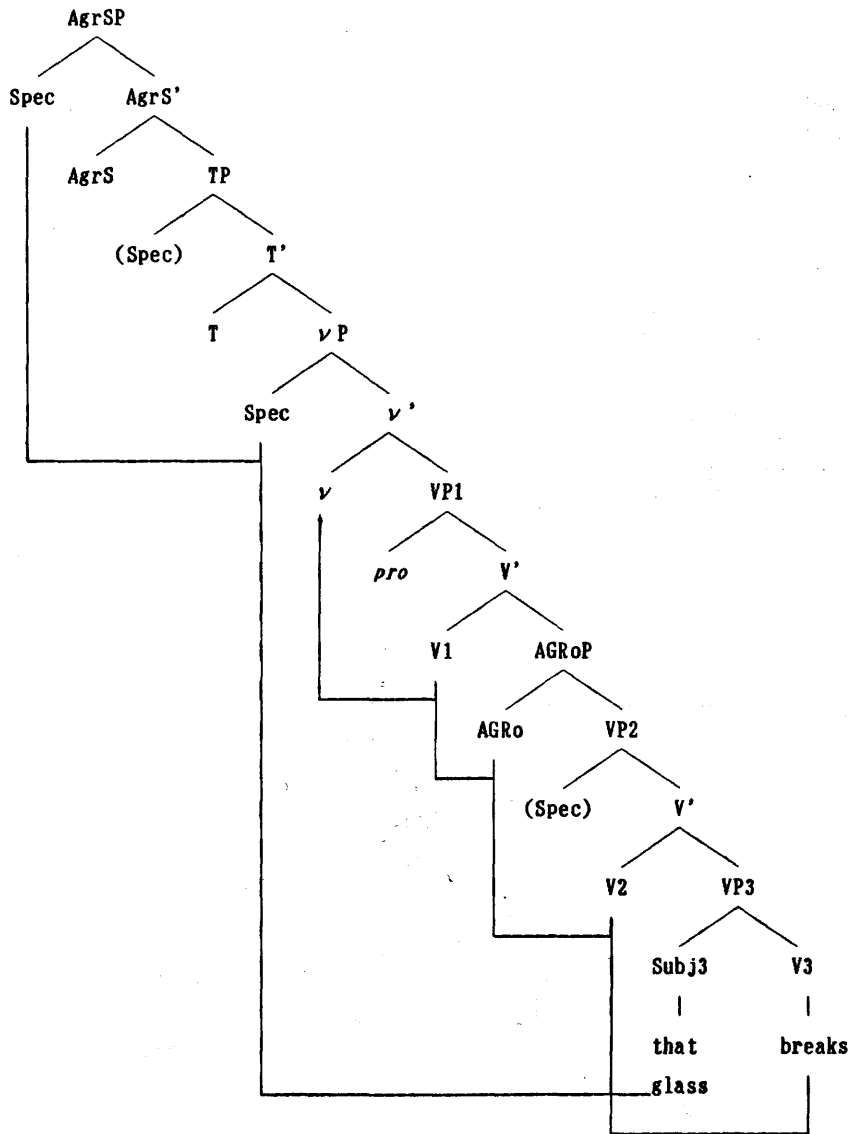
(20) a. 英語の中間構文と能格構文とは、素性[+EN]を持った要素を含む構文である。

b. 英語では、この素性[+EN]を持った要素は、音形を持たない。

c. 素性[+EN]は、必ず overt syntax でチェックされなければならない。

以上のような分析装置から、英語の中間構文の派生は、理論的必然として、(21)のようになる。

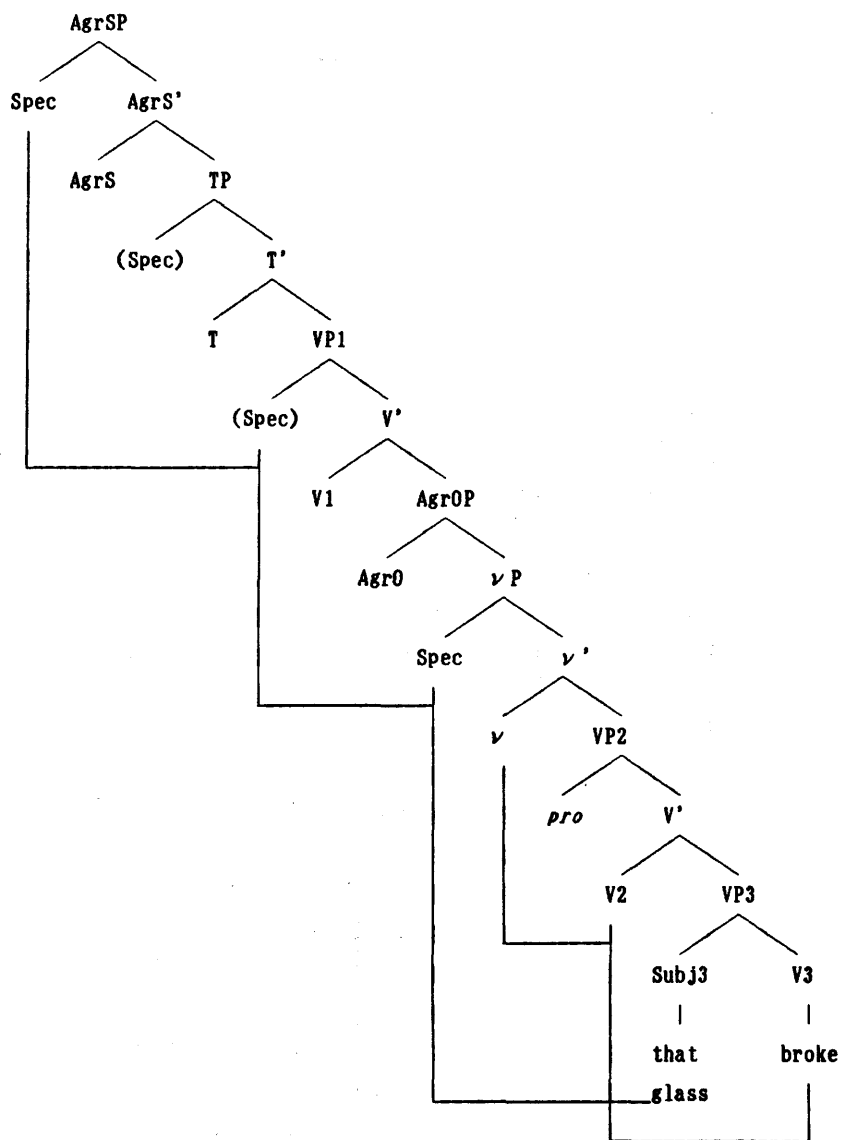
(21) 藤田による英語の中間構文の分析 (Fujita (1994b), (71b))



(21)で、implicit subject が Spec(VP1) の位置を占めていることから、(17)により、動作主としての解釈が成立している。また VP2 が incomplete, すなわち Complete Functional Complex を成していないことから、(18)の規定により、non-event の解釈が得られる。さらに、(19)によって、文は総称文としての解釈を受けることとなる。

次に、同じ分析装置によれば、英語の能格構文の派生は、(22)のようになる。

(22) 藤田による英語の能格構文の分析 (Fujita (1994b), (72b))



(22)で、implicit subject が Spec (VP2) の位置を占めていることから、(17)により、原因主としての解釈が成立している。また、VP2 が complete, すなわち Complete Functional Complex を成していることから、(18)の規定により、event としての解釈が得られる。さらに、(19)によって、文は存在閉包 (Existential Closure) を持つという解釈を受けることとなる。

このようにして、この藤田氏の理論的枠組みは、英語の中間構文と能格構文の意味論的な諸特性を、統語論上の派生と(17),(18)及び(19)で見た統語論と意味論との体系的な関連づけによって、きわめて明快に説明することに成功しているのである。

6. フランス語の中間構文と能格構文の統語論的分析

本節は本論文の核心部をなすものであり、本節において、第4節で挙げておいた *explananda* である(15)に対する、統一的な統語論的説明を提示する。

まず、前節で概観した藤田氏の英語についての分析に対して、言語間の差異を示す(23)に掲げるパラメータを導入する。

(23) 藤田の*ν*についてのパラメータ

ロマンス諸語では、藤田の*ν*が音韻上 *se, si* として実現し得る。

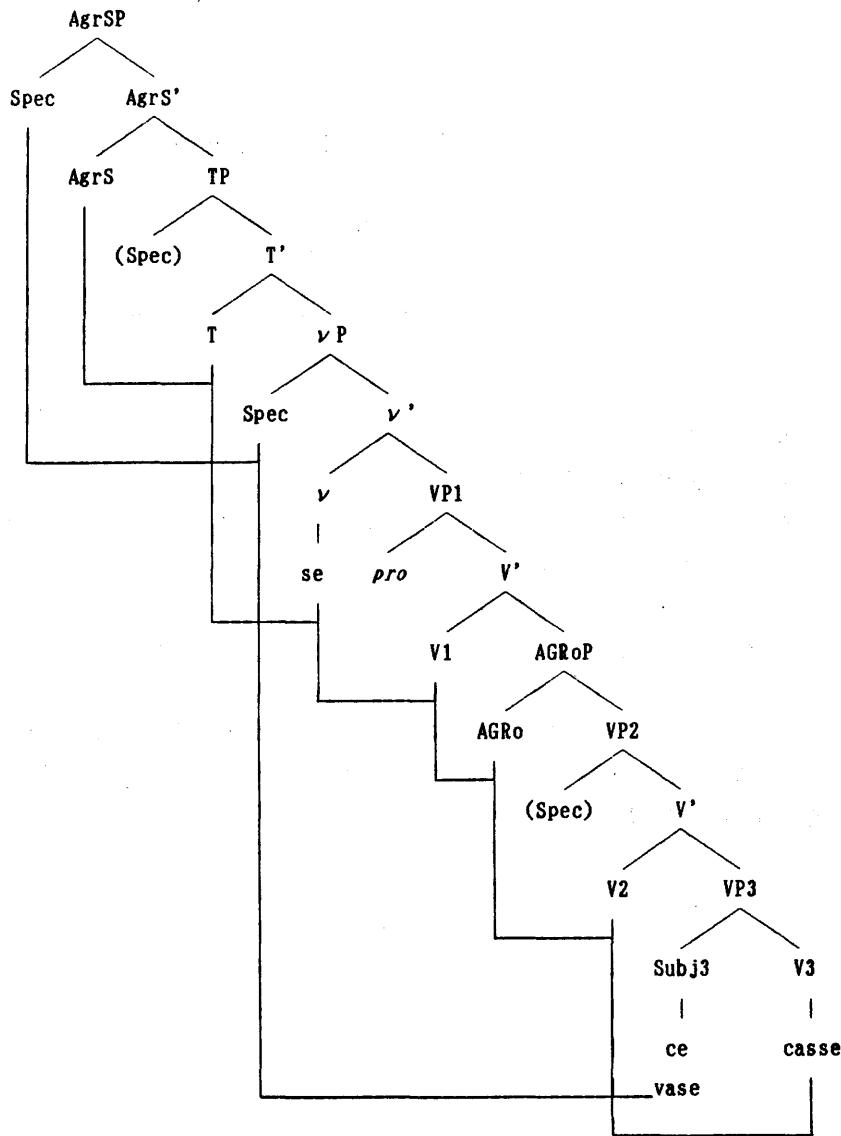
以下では、パラメータ(23)が、どのようにしてフランス語における中間構文と能格構文の統一的説明を可能にするかを見ていくこととしよう。

6.1 フランス語の中間構文の統語論的分析

中間構文に関しては、英語に対する藤田の分析と基本的に同一の分析が可能である。(24)の中間構文としての読み、すなわち、「この花瓶は(割ろうと思えば誰にでも)簡単に割れる」という読みに対応する統語論的派生を(25)に示す³⁾。

(24) Ce vase se casse facilement.

(25)



(25) で、implicit subject が Spec(VP1) の位置を占めていることから、(17) により、動作主としての解釈が成立している。また、VP2 が incomplete, すなわち Complete Functional Complex を成していないことから、(18) の規定により、non-event の解釈が得られる。さらに、(19) によって、文は総称文としての解釈を受けることとなる。

このようにして、フランス語の中間構文の持つ意味論的諸特性が、統語論的に説明できる。

6.2 フランス語の能格構文の分析

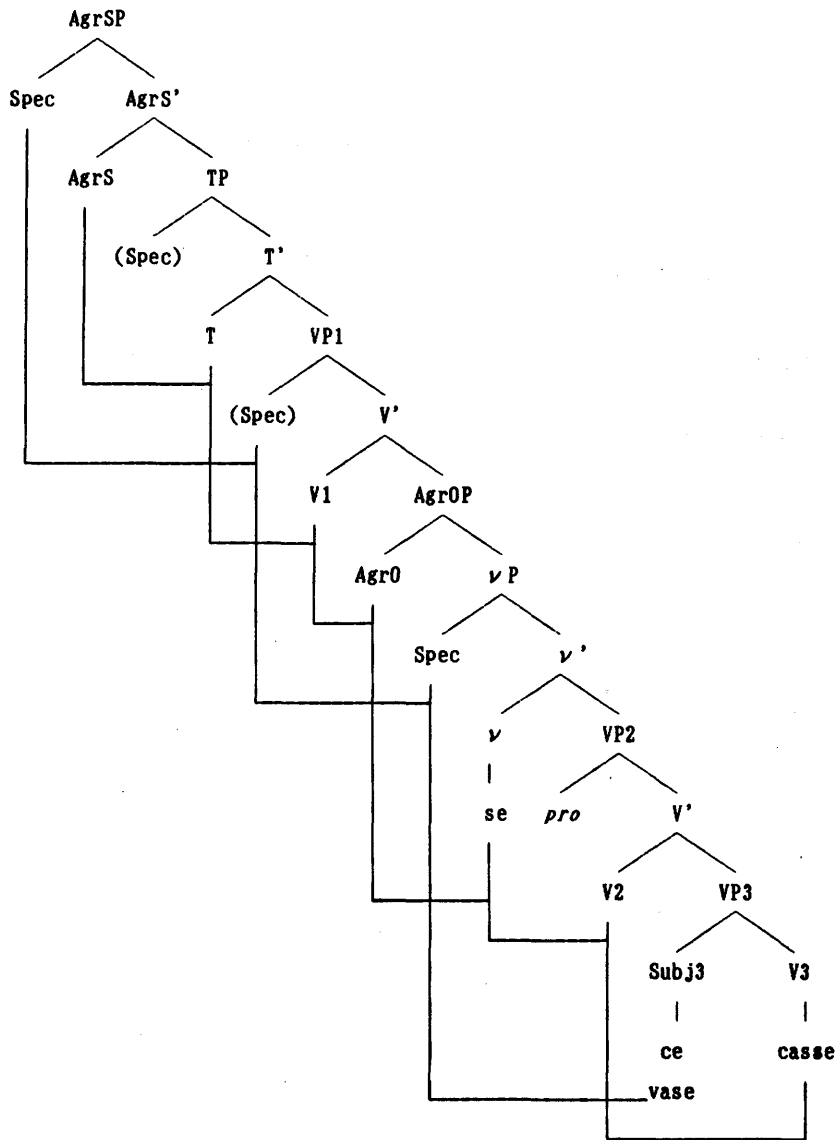
次に、能格構文の分析に移ろう。フランス語の能格構文には、上で見たとおり、代名動詞形によるものと、「自動詞」形によるものがあった。そこで、それぞれの形が本稿の枠組みによってどのように説明されるかを、順を追って見ていくこととする。

6.2.1 代名動詞形による構文の分析

代名動詞形による能格構文に関しては、英語に対する藤田氏の分析と基本的に同一の分析が可能である。(26)の能格構文としての読み、すなわち、「この花瓶はきのう割れた。」という読みに対応する統語論的派生を(27)に示す⁴⁾。

(26) Ce vase s'est cassé hier.

(27)



(27)で、implicit subject が Spec (VP2) の位置を占めていることから、(17)により、原因主としての解釈が成立している。また、VP2 が complete, すなわち Complete Functional Complex を成していることから、(18)の規定により、event としての解釈が得られる。さらに、(19)によって、文は存在閉包 (Existential Closure) を持つという解釈を受けることとなる。

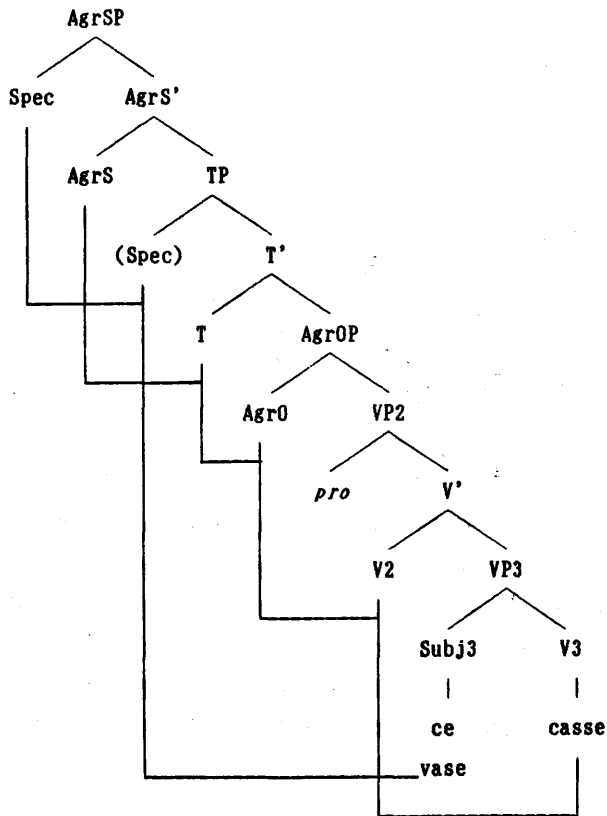
このようにして、代名動詞形による能格構文の持つ意味論的諸特性が、統語論的に説明できる。

6. 2. 2 「自動詞」構文の分析

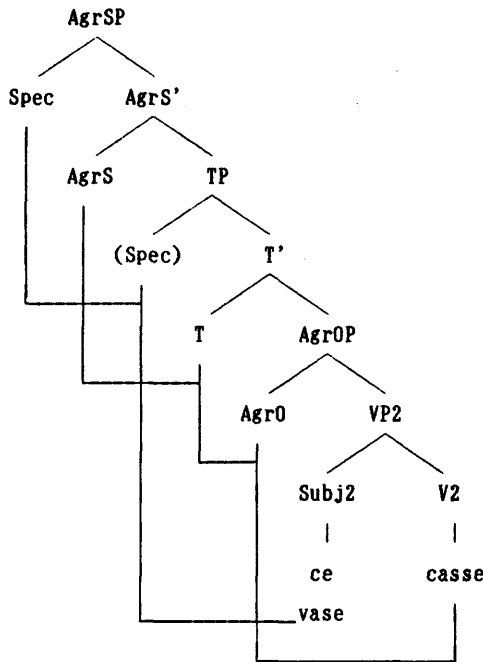
次に、「自動詞」構文の分析に移ろう。ここできわめて重要なことは、この構文、たとえば(28)に関しては、ふたつの converge する派生が考えられる、という点である。そのふたつの派生を、(29)と(30)に示す。

(28) Ce vase a cassé hier.

(29)



(30)



(29)は Spec (VP2) が投射された場合であり、(17)の規定により、*pro* が原因主としての解釈を受けることになる。すなわち、この場合は、代名動詞形による能格構文と同じ意味解釈を受けられるわけである。

これに対して、(30)は Spec (VP2) が投射されない場合である。この派生においては、外項が全く存在しなくなる点に注意されたい。このことから、外的な原因主も存在しないような解釈、すなわち「自発的」、自然発生的事態、という解釈が得られるわけである。

この(29)と(30)との対比は、意味論的に見て大変興味深い点である。フランス語における能格構文の2つのタイプ、すなわち代名動詞形と「自動詞」形との間にどのような違いがあるか、ということは、フランス語学における大きな問題として、様々な見解が表明されているところである。その中の代表的な見解のひとつとして、Rothemberg (1974) は、両者の間には(31)にまとめられたような差異がある、と主張している。

(31) Rothemberg (1974) の主張

代名動詞形による能格構文

présente le processus comme déclenché par un facteur extérieur au sujet.

プロセスを、主語に外在的な要素によって引き起こされたものとして提示する

「自動詞」形による能格構文

présente le sujet comme possédant des qualités permettant la réalisation du processus.

主語を、プロセスの実現を可能にする性質を持っているものとして提示する

本節で見えてきた能格構文に関する我々の統語論的説明は、まさにこの Rothemberg の主張を理論的、説明的に導出するものとなっているのである。

以上で見えてきたことによって、*explananda* (15) に対する解答が与えられたこととなる。ここで、本論文が提示したその解答を、(32) として、整理してまとめておくこととする。

(32) *explananda* (15) に対する統語論的説明

ν が出現する

V P 1 を補部を取る ———— 中間構文 潜在的動作主

V P 2 を補部を取る ———— 代名動詞形の能格構文

ν が出現しない

V P 2 の外項が投射 ———— 「自動詞的」能格構文

V P 2 の外項が投射しない — 「自動詞的」能格構文 自発, 内在的性質

} 潜在的
原因主

7. 非人称代名動詞構文の可能性についての統語論的分析とその意味論的帰結

最後に、本稿を終えるに当たって、上で提示した中間構文と能格構文とに関する統語論的分析から導かれる、極めて興味深い一つの理論的予測についてふれ、その予測が、まさしくフランス語の言語事実と一致していることを見ておきたい。

その理論的予測とは、代名動詞の非人称構文に関するものである。代名動詞の非人称構文に関して、春木仁孝氏の一連の研究 (春木 (1993a, 1993b, 1994)) が次のような興味深い指摘を行なっている。すなわち、(33a) は、「よいワインはカーヴで貯蔵しておくものだ。」という、規範などを表す典型的な中間構文の用法であるが、ここで (33b) は、こうしたタイプの文は非人称構文にはなり得ないことを示している。同様に、(33c) も、「結婚披露宴では多くのワインが飲まれるものだ。」という、総称的な意味を持つ中間構文として解釈される。したがって、「現象文」としての特性を持たせた (33d) のような環境で、この構文を用いることはできないわけである。ところが、(33e) のように非人称構文にすると、「現象文」としての解釈で文法的な文となるのである。

- (33) a. Un bon vin se conserve dans la cave.
 b. *Il se conserve un bon vin dans la cave.
 c. Beaucoup de vin se boit dans un repas de nocés.

d. *Beaucoup de vin se boira ce soir.

(「今晚は多くのワインが飲まれるだろう。」という文にならない。)

e. Il se boira beaucoup de vin ce soir.

(春木(1993a, 1993b, 1994))

春木氏によるこの指摘は、きわめて興味深いものであるが、本論文で提示した統語論的分析からも、(33b,e)で示されているように、代名動詞形の非人称構文が、個々の現象を提示する文になることが理論的に予測できるのである。以下にこのことを示そう。

まず、フランス語における非人称の *il* の統語論的機能について、(34)のように考えることはきわめて自然なことであり、これに反対する論者はおそらくいないことであろう。

(34) フランス語の非人称の *il* は T の EPP-feature, AgrS の Case-feature などの照合のための expletive element である。

(35) はこのこと具体的な証拠であり、b. から分かるとおり、非人称の *il* と動詞の人称変化とが一致していない場合には、当然のことながら、非文となるわけである。

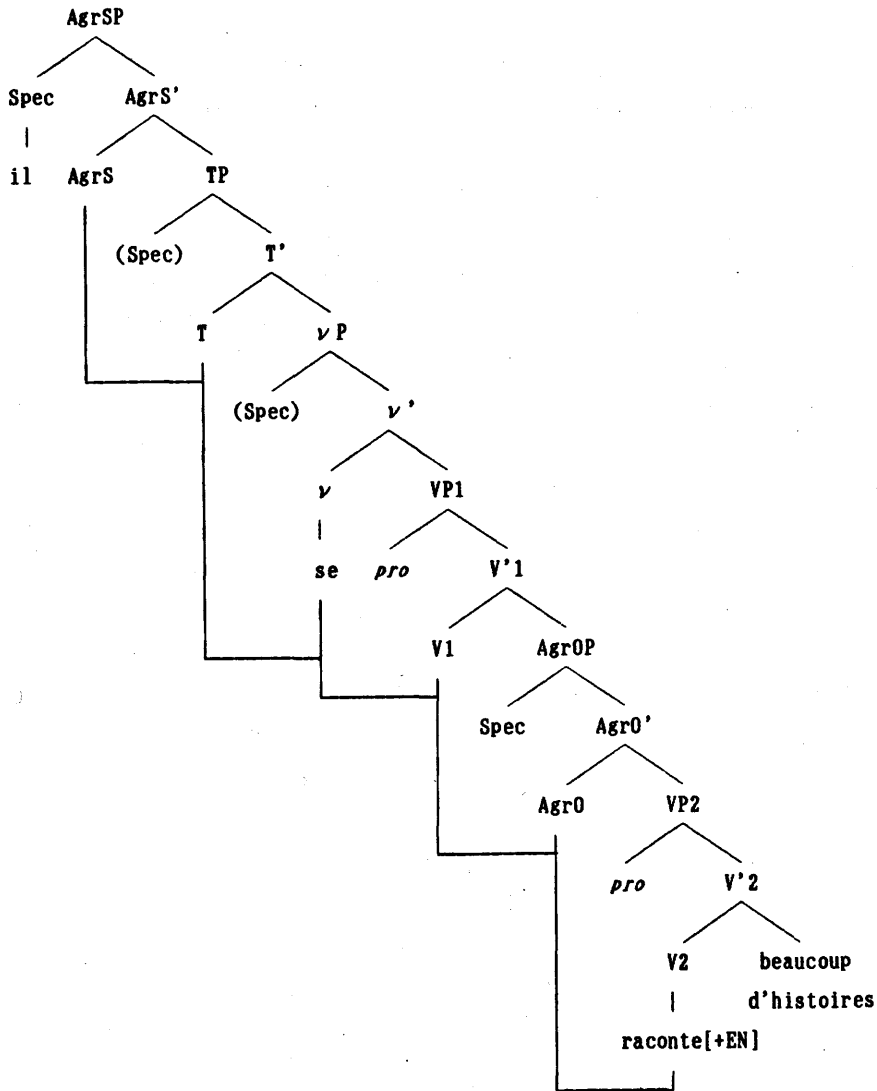
(35) a. Il se raconte beaucoup d'histoires sur cette affaire.

b. *Il se racontent beaucoup d'histoires sur cette affaire.

c. Beaucoup d'histoires se racontent sur cette affaire.

(34) を分析の前提とすると、たとえば (35a) に対して、(36) に示す派生が与えられることになる。

(36)



(36) から分かるように、非人称構文では、人称構文と異なり、VP2が completeである。このことから、event性を持った解釈、すなわち、「その件に関しては、(現に) 多くの話が出ている。」という解釈が得られるのである。

このように、代名動詞形の非人称構文の持つ意味解釈に関しても、純粹に統語論的な説明を提出できるところに、本論文で提示した分析の有効性が示されていると言えよう。

8. おわりに

以上、本論文では、フランス語の中間構文と能格構文に関して従来の研究で指摘されてきた様々な特性を、Minimalist Program に立脚する藤田耕司氏の一連の研究を理論的基盤として、統語論的に統一して説明できることを主張した。

本稿の中心をなしたのは、フランス語の代名動詞形の *se* が、藤田氏の提案された素性 [+EN] を持った主要部の実現である、という仮説であった。ここで伝統的なフランス語学の立場からは、中間構文と能格構文、すなわちフランス語学で称されるところの代名動詞の受動的用法と中立的用法については、本稿における分析が妥当であるとしても、代名動詞の主要な用法である再帰的用法と相互的用法については、*se* が主要部であるなどという分析はいかにも不自然であるから、本稿の統語論的分析は、代名動詞の用法を、一方で受動的用法と中立的用法、他方で再帰的用法と相互的用法というように二分して見ることとなり、かえって統一的な説明から遠ざかっているものではないか、という批判が生ずるかも知れない。

しかしながら、筆者は、事情は全く逆であって、本稿の基本的な仮説から出発しつつ、再帰的用法、相互的用法をも含む代名動詞形の全ての構文の持つ統語論的・意味論的諸特性を統一的に説明できる、という理論的展望を持っている。そのような理論的説明の具体的な筋道については、すでに口頭発表の形では三藤(1996)として提示したが、現在論文として執筆中である。

近年の N. Chomsky による Minimalist Program の提唱によって、生成文法はまた新たな段階に入ったわけであるが、本論文で見えてきたことから、この新たな枠組みがいかに豊かな理論的可能性を持っているかが分かるのである。

註

*本発表の内容を考察するに際しては、京都大学の藤田耕司先生に、御自身の御研究を、雑誌投稿の段階から見せて頂くなど、大変御世話になりました。ここに明記して深く感謝申し上げる次第です。また、本発表の内容の一部を慶應言語学セミナーにて発表した際に、明治学院大学の外池滋夫先生から多くの有益なコメントを頂きました。記して感謝申し上げます。

- 1) 以下本稿では、用語の原語としては、英語での表記を示すこととする。
- 2) 現在の生成文法の立場では、表層には「自動詞」として現れていても、派生の出発の段階では、対応する他動詞と全く同じ構造を持っていたものと考えている。いわゆる、「能格動詞 (ergative verbs)」または「非対格動詞 (unaccusative verbs)」である。したがって、以下では、括弧をつけて「自動詞」形」と表記することとする。
- 3) なお、副詞の *facilement* が、いずれかの動詞句の付加語 (adjunct) となっていることは自明である。具体的にどの動詞句の付加語となっているのか、という問題は、本論文における統語論的分析に何らの影響も及ぼさないので、本稿では追究しないでおく。

- 4) (25)の場合(上註3参照)と同じく、副詞の *hier* がどの動詞句の付加語となっているのかについては、ここでは追究しない。また、動詞のテンス・アスペクト変化形についても同様である。

参考文献

- 荒井文雄(1987a)「'se-moyen' 構文の意味論」, 『フランス語学研究』 21, pp. 36-45.
 荒井文雄(1987b)「東郷氏の批判に答える」, 『フランス語学研究』 21, pp. 47, 48.
 荒井文雄(1988)「中立代名動詞の派生について」, 『フランス語学研究』 22, pp. 81-89.
 Chomsky, N. (1992) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *Massachusetts Institute of Technology Occasional Papers in Linguistics*, 1.
 Condoravdi, C. (1989) "The Middle: where semantics and morphology meet," *Massachusetts Institute of Technology Working Papers in Linguistics*, 11, pp. 16-30.
 Diesing, M. (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
 Endo, Y. and M. Zushi (1993) "Stage/Individual-Level Psychological Predicates," in Nakajima, H. and Y. Otsu(eds.) (1993), pp. 17-34.
 Fagan, S. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry*, 19-2, pp. 181-203.
 Fagan, S. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
 Fellbaum, C. (1986) *On the Middle Construction in English*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.
 Fellbaum, C. and A. Zribi-Hertz (1989) *The Middle Construction in French and English*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.
 Fujita, K. (1993) "Nominative Objects and Economy of Derivation," 第42回待兼山ことばの会「Workshop on Minimalistic Syntax」口頭発表及びハンドアウト。
 Fujita, K. (1994a) "Middle, Ergative & Passive in English — A Minimalist Perspective," *Massachusetts Institute of Technology Working Papers in Linguistics*, 22, pp. 71-90.
 Fujita, K. (1994b) "Economy of Derivation and the English Middle," in Park, S.-H et al. (1994), pp. 169-195.
 Fujita, K. (1994c) "The Syntax of Middle and Ergative Formation in English," ms., Osaka University.
 Fujita, K. (1995) "Split VP structure and the Minimal Link Condition," 上智大学セミナー口頭発表及びハンドアウト。
 Hale, K. and S. J. Keyser (1987) "A View from the Middle," *Massachusetts Institute of Technology Lexicon Project Working Papers*, 10.
 Hale, K. and S. J. Keyser (1988) "Explaining and Constraining the English Middle," *Massachusetts Institute of Technology Lexicon Project Working Papers*, 24, pp. 41-58.
 春木仁孝(1987)「フランス語の中立的代名動詞と非人称受身」, 『言語文化研究』 XIII, pp. 63-83.
 Haruki, Y. (1993a) "Sémantique de la construction réflexive," Journées d'études de la linguistique française 口頭発表及びハンドアウト。
 春木仁孝(1993b)「中立的代名動詞と受動的代名動詞の意味論」, 日本フランス語学会例会口頭発表及びハンドアウト。
 春木仁孝(1994)「中立的代名動詞と受動的代名動詞」, in 泉邦寿他編(1994), pp. 32-52.
 春木仁孝(1996)「現代フランス語の再帰構文再考」, 『言語文化研究』 22, pp. 171-194.
 泉邦寿他編(1994)『日仏語対照研究論集(日仏語対照研究会研究成果報告書)』。

- Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry*, 17-4, pp. 587-622.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry*, 15-3, pp. 381-416.
- 松本マスミ (1993) "English Middles as Individual-Level Predicates," 日本英語学会第10回大会ワークショップ口頭発表及びハンドアウト.
- Matsumoto, M. and K. Fujita (to appear) "The English Middle as an Individual-Level Predicate," ms., to appear in SEL.
- 三藤 博 (1996) 「中動態 (Voix moyenne) としての代名動詞」, フランス語学談話会口頭発表及びハンドアウト.
- Nakajima, H. and Y. Otsu (eds.) (1993) *Argument Structure : Its Syntax and Aquisition*, Kaitakusha, Tokyo.
- Park, S.-H et al. (1994) *Minimalist Approaches to Syntax and Morphology*, Hankuk, Seoul.
- Roberts, I. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Roberts, I. (1991) "Excorporation and Minimality," *Linguistic Inquiry*, 22-1, pp. 209-218.
- Rothemberg, M. (1974) *Les Verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, Mouton, La Haye (Den Haag).
- Ruwet, N. (1972a) "Les constructions pronominales neutres et moyennes," in Ruwet (1972b), pp. 87-125.
- Ruwet, N. (1972b) *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seuil, Paris.
- Stroik, T. (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry*, 23-1, pp. 127-137.
- 東郷雄二 (1987) 「荒井氏の論文に寄せて」, 『フランス語学研究』 21, pp. 45-47.
- Zribi-Hertz, A. (1982) "La construction 'se-moyen' du français et son statut dans le triangle Moyen-Passif-Réfléchi," *Linguisticæ Investigationes*, VI-2, pp. 345-401.
- Zribi-Hertz, A. (1987) "La réflexivité ergative en français moderne," *Le Français moderne*, 55-1/2, pp. 23-54.